

町の文化財あれこれ 其の七十七

町の口頭伝承「一刀両断の墓石」

中井町に「一刀両断の墓石」という口頭伝承があり次の内容が町誌に記載されています。

『米倉寺の開基、米倉丹後守種継を供養するために建立された宝篋印塔の塔身は、二つに切断された形跡がある。地震などのたびに倒れ、あちこちの角が欠けたりしたので、今では補修工事が施されている。』

甲州武田の家臣だった種継は、地頭旗本として井ノ口に居住し、井ノ口、二宮、平塚などの一部を知行していたという。両親は、甲州の恵林寺に埋葬されているが、両親の供養と自身の二世安楽のため、この地にあった用国院(大雄山最乗寺)の孫末の寺を建て直して、米倉寺に改めたと伝えられている。

天正十年(一五八二)三月十一日、主君武田勝頼が織田、徳川連合軍に敗れ、天目山麓で滅亡し、父も討ち死にしたという。そのために、以後、徳川家康に仕え、大阪冬の陣と夏の陣に井ノ口から出陣し、多くの功績を残して、寛永十三年(一六三六)四月八日に逝去した。その子、米倉平太夫繁次が石塔を建て、供養のために宝篋印塔を建立したが、武田の残党が「米倉氏は二君に見えたり」として刺客をさし向けた。昔は、一君に仕えて背信しないのが通念であったため、武田亡き後、徳川に仕えた米倉氏を許す訳にはいかなかったのである。ところがすでに種継は他界していたため、無念のあまり、「一念蔽をも通す」とばかり供養塔に切りつけ、塔身は斜めに真つ二つに切り離されたという。

なお、種継の石塔は一枚石で、「神奈川の石仏」(松村雄介著、有隣新書)には近郷では最大級の物と紹介し、宝篋印塔四基も近郷屈指の雄姿を誇り、一〇基の墓石が町の重要文化財の指定対象になっている。』

といった内容で、見事に真つ二つにされた宝篋印塔(高さ二三センチ)を見れば、刺客の無念さが今に伝わるといえるものです。しかし、この話にはいくつかの疑問点があります。

①「二君に見えず」という思想は、戦がなくなり世の中が安定した江戸中期以降になってからの話です。

②宝篋印塔は種継が亡くなった後に建立されたので寛永十三年(一六三六)以降です。武田の滅亡は天正十年(一五八二)なので刺客が来たのは武田滅亡後五十年以上も過ぎてからの話になります。

③武田滅亡後家康に仕えた米倉家当主は、当時米倉忠継です。従って刺客の対象は弟の種継では無く兄の忠継になります。

④亀裂が入っているのは宝篋印塔です。怒りをぶつけるならば近くにある種継の墓石に切りつけるはずで。

⑤宝篋印塔は大きくても刀で切れるようなものではありません。この切断跡は建立後、長い年月が経過して、石の経年劣化や地震などの外力で生じたものと推測されます。



宝篋印塔

以上のことから、江戸中期以降に生じた宝篋印塔の亀裂が斜め一直線であるのを見て誰ともなしに「まるで刀で一直線に切ったみたいだ。これは米倉が徳川に仕えたのを恨む武田家臣の怨念のせいではなからうか。」などと言っているうちに出来上がった口頭伝承で江戸の中期から末期にかけて作られたものが伝承されたと推測されます。

戦国時代以前では、自分の所領を安堵し増やしてくれる強い武将のために必死で仕えました。しかし、負けてしまえば他の強い武将の傘下に入り自分の所領を安堵するのはごく普通のことでした。しかし、江戸時代になると封建体制が確立し、戦で所領を失う恐れが無くなりました。そのため幕府は武士が主君に対し忠誠心を失い封建体制が崩壊するのを恐れました。さらに主君が無能であっても下臣は忠誠心を失わないようにする必要がありました。そこで忠臣は「二君に見えず」などということを中国の古事から引用し、武士に広めた政治的なプロパガンダでした。しかしこれらの教えは武士以外にも広く浸透し、忠臣というものは昔から「二君に見えず」と一般でも思われるようになっていたので、このような話が作られ伝承されたと推測されます。

参考資料 中井町誌・中井村誌・武川村誌

(文化財保護委員 関谷 満)